

## 大木茂写真集「汽罐車」

新宿書房二〇一一 三月

佐藤 喜一



一八回生の大木茂君から、一冊の書物が届けられた。ずっしりとした重厚な本。二五センチ×二五センチ、厚さは二センチ。計量したら、千七十グラムあった。ちなみに松本清張の『点と線』の文庫版は一三五グラム。タイトルは『汽罐車』。そう、その名のおり重量感のある写真集である。

若い方は、汽罐車と書かれると、はて？と思われのではないか。でも、帯にある「蒸機を追った青春の残照」という文字に目をやれば、そう、これはかつて活躍した、そして今は消えていった蒸気機関車の姿をとどめた写真集、ということに気が付くだろう。

大木君は昭和三八年（一九六三）の入学。実は私もその年に母校に赴任してきた。たしか一年次に大木君のクラスでは古典の授業を担当したように思うが、その時十五歳だった大木君が、五十年ちかくたって「よみがえる鉄路の記憶」を一冊にまとめあげようなどとは、想像しえないことだった。

この写真集には、一九六三年から七二年にわたって、若き大木君が旅をしながらフィルムに収めた汽車たちのモノクロ写真が、沢山載っている。いずれも、SL健在なりし頃の「汽車」たちの姿である。されど、汽車だけじゃない。そこには汽車を動かす人たちや利用する人たちの姿も、しつかりととらえられている。

さらに、汽車と人だけでなく、山もあり、河もあり、村もあり、田圃も広がっている。そこには、まちがいなく、「日本」と「日本人の生活」とが刻印されているのだ。

巻末に著者のことばがある。これが実にいいのだが、その中に「旅は僕の学校だった」というフレーズがあった。宿泊代を節約するため夜行列車を利用したり、寝袋を背負って旅に出、旅先でさまざまなことを学び、そして蒸機の牽く列車の映像を通して、自己の青春を定着してきたのだった。

山岳部に所属していた著者だからか、山をバックに汽車をとらえた写真が多い。それが、実に心をなごませてくれる。山を眺めながら旅をしているような気分になる。嬉しい。

ぜひともこの一冊を机上に置き、鉄路の記憶をよみがえらせるとともに、大木君の青春の旅を読みとってほしい。

参考 モノクロームの残照・大木茂ウェブ  
サイト

<http://home.t01.itcom.net/ohki.ph>